

原 著

眼科領域における転移性腫瘍の予後

Prognosis of Metastatic Tumor to the Ocular Region

太田 亜紀子 難波 克彦

Akiko OTA, Katsuhiko NAMBA

要 旨

眼科領域の転移性腫瘍の予後について検討した。対象は最近10年間に当科で転移性腫瘍と診断された症例13例。原発巣は肺癌6例、乳癌2例、子宮体癌2例、肉腫2例、急性リンパ性白血病1例。転移巣は脈絡膜6例、眼窩内浸潤5例、虹彩2例。転移巣に対する治療は照射5例、化学療法3例。眼科受診から死亡まで平均14.0ヶ月。ほとんどが半年前後で亡くなったが、乳癌は2例とも3年以上生存しており、肺癌に比べ、乳癌は転移後も予後が長いという従来の報告と同様の傾向がみられた。脈絡膜転移の治療では腫瘍が縮小しても放射線網膜症で視力低下した症例もあった。虹彩転移は続発緑内障を併発しており、照射で腫瘍は縮小しても眼圧はあまり下がらなかった。治療の進歩によって生命予後が改善してきている乳癌などの症例ではいかに視機能を維持するかが重要と考えられた。

はじめに

近年、がん患者数は増加傾向にあり、治療の進歩によってがん患者の生命予後が改善したことにより、以前は稀な病態と考えられてきた眼科領域への転移性腫瘍も増加傾向にあるといわれている。

がん専門病院である当院での眼科領域の転移性腫瘍の予後がどのようになっているか、検討した。

対象と結果

対象は1997年から2006年までの10年間に当科外来で転移性腫瘍と診断された症例をカルテに基づき、検討した。

症例は13例で、男性2例、女性11例。年齢は41～70才で、平均 57.4 ± 9.8 才だった。

原発巣は肺癌6例（6例とも腺癌）、乳癌2例、子宮体癌2例、肉腫2例（右大腿骨osteosarcoma 1例、右足clear cell sarcoma 1例）、急性リンパ性白血病1例であった。がんセンターという病院の性格上、全員が他科ですでにがんの診断を受けており、眼科が初発でがんが発見された症例はなかった。患側は右眼4例、左眼6例、両眼3例であった。13症例を表1に示す。眼科初診時、全例ですでに他の部位にも転移があり、眼科が初発転移の症例はなかった。

原発巣が診断されてから眼科受診までの転移期間は、最短2週間、最長9年、平均23.7ヶ月だった。原発巣の診断から転移までの期間は症例によるばらつきがあり、疾患による傾向はみられなかった。

眼科受診から死亡までの転移後生存期間は、最短1ヶ月、最長59ヶ月、平均14.0ヶ月であったが、2年以上生存した4例が数字をおしあげていて、この4例以外はほとんど半年前後で亡くなっていた。肺癌は1例を除いて半年以内に亡くなっていたが、乳癌の2例はいずれも3年以上生存していた。

表1 症例のまとめ

症例	性別	年齢	原発	他転移	転移(月)	転移巣	治療	予後(月)
1	女	71	肺癌	骨、皮膚	41	虹彩		1
2	女	47	肺癌	脳、縦隔	10	脈絡膜		1
3	女	61	肺癌	骨、肝	7	脈絡膜	照射	36
4	女	67	肺癌	骨、副腎	5	脈絡膜	化療	3
5	男	70	肺癌	骨、肝	4	虹彩	照射	7
6	女	48	肺癌	肝	0.5	脈絡膜	照射	4
7	女	53	乳癌	骨、肺	72	脈絡膜	照射	44
8	女	60	乳癌	胸壁	1	眼窩内	化療	59
9	女	65	子宮癌	骨、脾	14	眼窩骨		1
10	女	55	子宮癌	肺、脳	109	脈絡膜		1
11	女	62	骨肉腫	肺	19	眼窩内	化療	22
12	男	41	肉腫	骨、肺	18	眼窩内	照射	1
13	女	46	ALL	副鼻腔	7	眼窩内		2

転移後生存期間(図1)

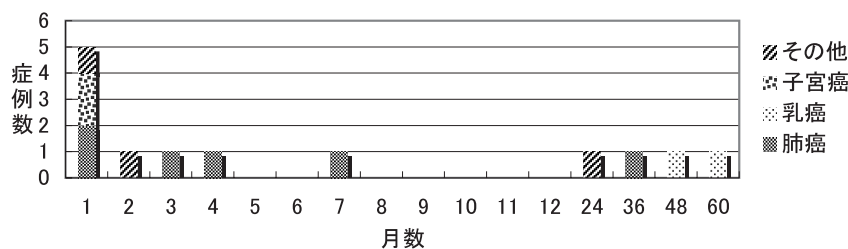


図 1 転移後生存期間

眼科転移部位は、脈絡膜腫瘍 6 例、眼窩内浸潤 5 例、虹彩腫瘍 2 例であった。眼窩内腫瘍では全身状態不良の症例が多く、照射などができず、まもなく亡くなるが多かった。転移巣に対する治療は照射 5 例、化学療法 3 例であった。表 1 で眼科治療が空欄の症例は、主治医からすでに全身状態が悪く、加療不能とされた症例で、2 ヶ月以内に亡くなっていた。

考 察

従来報告では肺癌は乳癌より原疾患の発見が遅いため、眼科領域への転移期間が短いとされる¹⁾が、今回の検討では転移発見までの期間に肺癌と乳癌で差はみられなかった。しかし、眼科領域がん転移後の予後では肺癌は 1 例を除いて半年以内に亡くなっていたが、乳癌の 2 例はいずれも 3 年以上生存しており、肺癌に比べ、乳癌は転移後も生存期間が長いという従来報告²⁾と同様の傾向がみられた。年齢による予後の差に一定の傾向はみられなかった。眼科領域でのがん転移で最も多い脈絡膜転移では、ほとんどが血行性転移のため、左の総頸動脈が大動脈から直接分岐する左眼に多いとされる³⁾⁴⁾が、当科の症例では脈絡膜転移 6 例は左眼 3 例、右眼 1 例、両眼 2 例で明らかな差はみられなかった。両眼転移は乳癌に多いとされる⁵⁾が、当科では乳癌 1 例、肺癌 1 例であった。脈絡膜転移は後極に多いが、照射で腫瘍が縮小して視力改善した症例もあった。しかし、腫瘍が縮小しても放射線網膜症をきたして視力低下した症例もあった。

虹彩転移では 2 例とも続発緑内障を併発しており、1 例はすでに緑内障末期で治療せず、1 例は照射をした。照射で腫瘍は縮小しても眼圧はあまり下がらず、抗緑内障薬や照射による副作用の角膜炎発症で角膜所見が悪化することもあった。

当科での転移性腫瘍の患者は年間 1~2 例くらいである。照射などの治療をしてもほとんどが半年以内に亡くなられるので、患者の全身状態、生命予後を考慮した上での治療の選択が難しいところである。日本では最近乳癌の発生頻度が増加するとともに治療の進歩により生命予後が改善されてきているため、今後脈絡膜転移が増加すると考えられており⁶⁾、このような症例ではいかに視機能を維持するかを考慮して治療方針を検討することが重要と考えられた。

参考文献

- 1) 箕田健生：癌のブドウ膜転移. 癌の臨床. 27 : 1021-1032, 1981.
- 2) 矢野真知子：転移性脈絡膜腫瘍 53 例の検討. 臨床眼科. 45 : 1347-1350, 1991.
- 3) 登坂良雄：肺癌原発と考えられる転移性脈絡膜腫瘍の 1 例. 日本眼科紀要. 39 : 1177-1184, 1988.
- 4) 津田恭央：長崎大学における過去 10 年間の転移性脈絡膜腫瘍について. 臨床眼科. 46 : 508-509, 1992.
- 5) 矢部比呂央：転移性脈絡膜腫瘍. 眼科. 42 : 153-158, 2000.
- 6) 金子明博：遠隔転移巣の重点的治療, 眼. 乳癌の臨床. 9 : 31-36, 1994.